

Title	知識社会基盤への転換期における「知識産業革命」とその事業戦略
Author(s)	旭岡, 叡峻
Citation	年次学術大会講演要旨集, 29: 936-939
Issue Date	2014-10-18
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/12599
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

知識社会基盤への転換期における 「知識産業革命」とその事業戦略

○旭岡勸峻（（株）社会インフラ研究センター代表取締役）

はじめに

1. 「知識」の新たな戦略的意義と知識基盤社会
2. 知識産業革命とは
3. 知識産業事業戦略
4. 知識経営構造

最後に

はじめに

知識基盤の社会構造がいよいよ本格化している。時代の転換期ともいえるべき変化である。センサー、GPS、電波、画像等の発展によって、これまで知ることのできなかった領域例えば、微細な動き、微細な物性、詳細な位置、物体の様相、脳内の機能等でのデータの検知が可能になり、これを分析、解析するアルゴリズムやソフトの発展、さらに高速で伝送できる通信技術やネットワーク技術等により、未知の領域の知識の世界が認識できるようになり、まったく新しい知識の獲得が可能になっている。世界的な企業も、産業分野のインターネット（M&M）、モノのインターネット（IoT=Internet of Things）、さらにドイツでのインダストリー4.0のように、モノとモノがネットで接続したり、もの同士が情報交換できるような競争世界が出現している。これは①ネットワーク深化、②新しい知の実装、③ヒトと機械の連携、④社会インフラの変化、⑤再生医療や脳科学応用等が急速に社会構造を変化させている。

新たな知識科学の展開が、未来社会のイメージを換えつつある。この未来社会は、我々の社会スタイルの変化や産業の成立条件や新たな事業開発の展開を変えていく。

1. 「知識」の新たな戦略的意義と知識基盤社会

知識が戦略的な意味の時代になった。

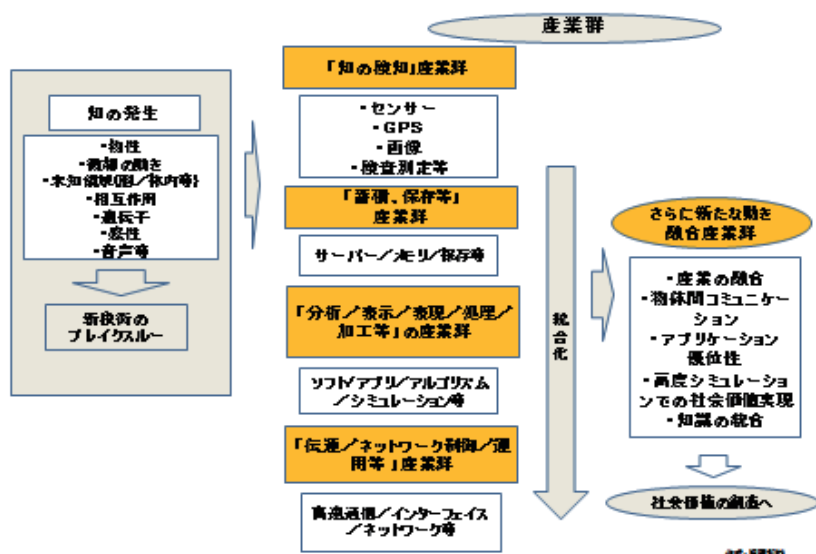
いろいろな知識技術基盤が創造されて、これまで知り得なかった未知領域がデータとして検知され、加工分析され、新たな産業の創造や産業間の融合やサービス産業化の迅速な動きになっている。つまり、まったく新たな産業が生まれてくることで、社会構造、国家構造が変革してくる。

参考1-1:変化の予兆



参考1-2のように、知識を軸としての強大な産業群が生まれようとしている。

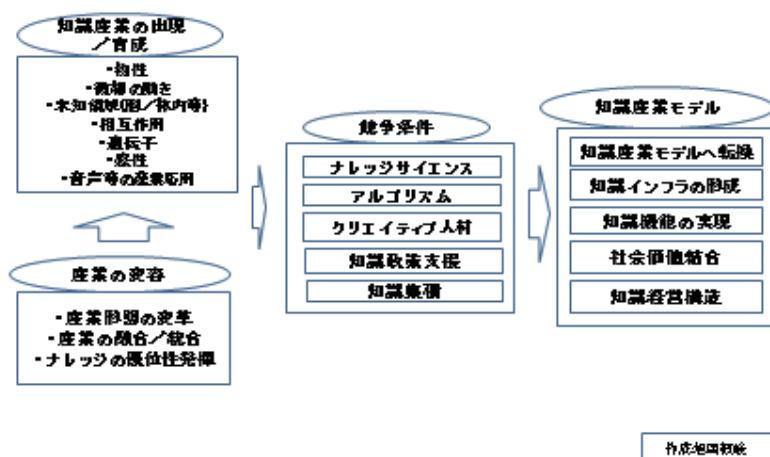
参考1-2: 巨大な産業群の出現



2. 知識産業革命とは

知識によって産業の姿が激変する。知識産業の出現は、・物性・微細の動き・未知領域（脳／体内等）・相互作用・遺伝子・感性・音声等の産業応用が可能になり、産業の変容（・産業形態の変革・産業の融合／統合・ナレッジの優位性発揮等）をもたらす。競争条件もナレッジサイエンス、アルゴリズム、クリエイティブ人材、知識政策支援、知識集積が不可欠になる。その結果、新たな知識産業モデルの形成へと向かうことになる。

2. 知識産業革命とは

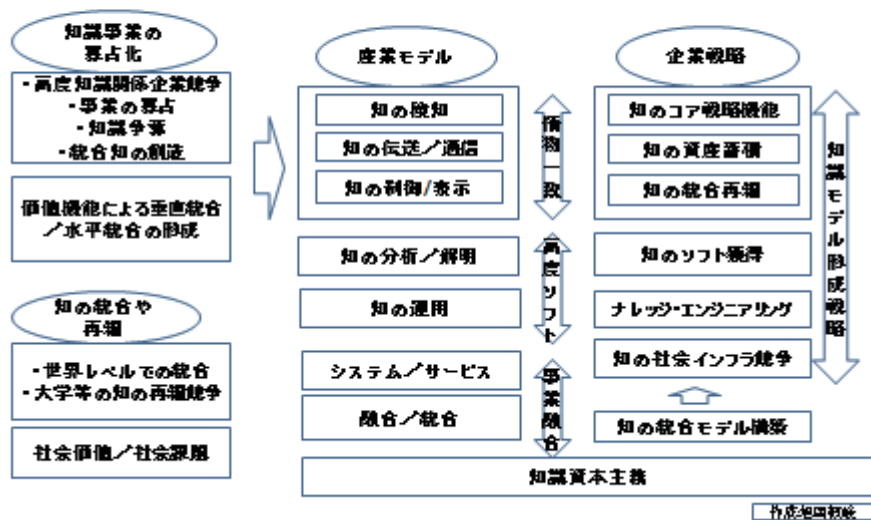


その流れは先駆的な戦略の深化とは次元の異なる新たな枠組みが重要になる。つまり、新たな知識社会の構造的な変化が国家戦略や政策に反映され、知識構造の枠組みを食味として持つ組織体や人間の諸活動へと変貌していくと考える。

3. 知識産業事業戦略

このような知識産業における事業戦略は、これまでとは大きく異なる

3. 知識産業事業戦略 (知識資本主義)

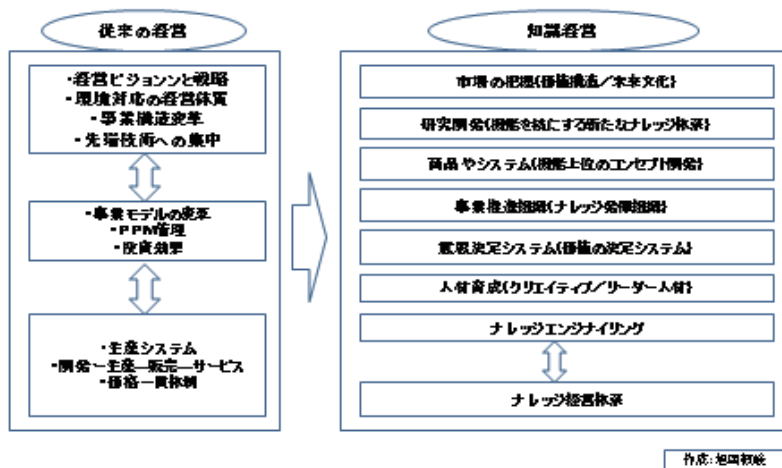


そこには、・高度知識関係企業競争・事業の寡占・知識争奪・統合知の創造等の寡占化傾向が強くなり、価値機能による垂直統合／水平統合の形成が起こる。また、社会課題解決のための知の統合や再編といったプロセスが起こりうる。この結果、情報と物の一致、高度ソフト、事業統合が強化され、知のコア戦略機能、知の資産蓄積、知の世界規模の再編統合、知のソフト獲得、ナレッジエンジニアリングともいうべき取り纏め技術、知の社会インフラ構築競争による知識モデル形成戦略が展開されることになる。

4. 知識經營構造

この知識産業モデルを推進する経営構造は、これまでの工業化社会、情報社会での経営構造ではなくナレッジを実現し、社会価値へ結合させるナレッジウエア上位の経営構造へと変化せざるを得ない。

4. 知識經營構造



①市場の把握（価値構造／未来文化）

市場はこれまでの製品消費の市場ではなく、価値実現に対応する新たな未来文化の形成規模として把握すべきもの。

②研究開発（機能を核にする新たなナレッジ体系）

研究開発は新たな技術を開発するのではなく、価値機能を開発するための実現技術を迅速に目利きして応用すること。

③商品やシステム（機能上位のコンセプト開発）

アナリスなモノづくりからシンシスな価値上位のものづくりへ移行する。

そこには機能をどのようにデザインするのかの創造力が重要になる。

④事業推進組織（ナレッジ発揮組織）

事業推進形態は、これまでの組織体制ではなく、目的に対応できるファイル構造的なP J組織によって迅速に目的を果たすことが主眼の組織編成となる。

⑤意思決定システム（価値の決定システム）

意志決定システムは、目標を明確にしてそれを実現する構想力のあるリーダーの存在が権限と意思をもって、実現するいわばプロデューサーの存在であり、迅速な実現能力が重要になる。

⑥人材育成（クリエイティブ／リーダー人材）

人材も高度な創造能力を有するクリエイティブ人材の獲得競争であり、グローバルな形での知の戦略的な配置こそが、昨日の実現を可能にする。

⑦ナレッジエンジニアリング

知識社会のナレッジ取り纏めは、「ナレッジエンジニアリング」ともいうべきプロセスが必要で、そこには未来社会イメージ構想や多様な知識を集合させて、新たなナレッジを構築するプロセスが不可欠になる

⑧ナレッジ経営体系（知識バランスシート）

新たな「知の集積」から最適な解決設計を行い、新たな未来価値創造に方向付けることが重要である。また戦略思考人材を、組織を超えて結集し、経営資源の新たな活用のできる基盤形成を迅速に行なうことが重要となる。これは各実現すべき機能の目的に合わせて、経営資源をファイルから取り出すように構成し、戦略化する組織展開でもある。それはこれまでのバランスシート経営から知識バランスの優劣が重要になる経営体系の見直しでもある。こうした世界的な未来価値創造の経営の仕組みが緊急になっている。

最後に

今後の知識社会の実現を考えるため、知識の膨大な拡大と戦略視点の確立が必要となる。

従来、こうした視点の確立には、知識内容別に、社内もしくは社外の専門家集団で検討できる組織が必要であり、知識システム別に、自然科学、人文科学・社会科学分野の知見を関係させて、多様な視点からの意味設計が必要である。分野の狭い範囲に分断された知見を統合し、先ず俯瞰的な視点からの新しいシステム発想が重要になるからである。

その意味で、知識社会は課題解決の創造性の競争でもある。

知識体系を迅速に推進し、かつ最新の技術／ソフト導入を構想する。また、知識基盤が構築された後、新たな産業の創造やその運用のための人材の集積・育成を目指すことを視野に入れて、長期的な展望を展開していく。ますます多様化の様相を呈していくが、社会価値を創造するためには、科学技術のみでなく、社会科学・人文科学の領域を融合して事象の「観察と洞察」がマネジメントに組み込まれて、市場創出を主導し、創造的な課題解決を行う人材や 創造的な課題解決の組織構築を行うという経営スタイルが求められているのである。今後 ・知識資源は無限・知識＝社会価値化・知識の循環＝投資行動・知識資本社会が社会構造を変革する・もの生産から価値の生産・知識化＝資本投下収益といった新たな知識資本主義への構想も検討の視野に入れる。我々は、新たな世界に突入している。知識がこれまで以上に重要な役割と機能を発揮し、未来の社会構造を換え、国家戦略、企業戦略を変革する。さらに、社会における人間の存在や企業組織における雇用の在り方や資本主義の限界を超える未来社会を予感させる。我々は、これまでとは全く異なる国家、産業、社会、経済の模索をする時代になっている。GDPからGDPからGKVへ（Gross Knowledge Value）も、この大きな転換の提起となる。